



富岡製糸場総合研究センターだより

No. 36

(2024年2月発行)

富岡製糸場をもっと楽しむための豆知識をお届けします！

富岡製糸場と電柱

富岡製糸場が操業を開始した1872（明治5）年には、まだ電気がなく繰糸器械を動かす動力は蒸気機関でした。また、繰糸所では窓からの自然光を明かりとしていましたが、後にガス灯が繰糸台の上に取り付けられています。富岡製糸場が電化されたのは、1919（大正8）年に西毛電機株式会社によって「一ノ宮変電所」（後に「北甘変電所^{ほっかん}※」）と改称）が建設され、1920（大正9）年から富岡地区に電力が本格供給されたことにより、富岡製糸場では繰糸器械などの動力として、この年から電気モーターが使われ始め、繰糸台の上のガス灯も電灯に変わっていきました。

富岡製糸場には東置繭所^{ひがおきまゆじょ}の東側に1948（昭和23）年に建てられた「高圧変電所」があります。この施設は「北甘変電所」から送られた高電圧の電気を送電線から引き込んで、工場内で使える電圧に変えて配電するためのものです。そのため場内には多くの電柱が建てられました。電柱は昭和30年代にはコンクリート製などで作られるようになりますが、場内には今ではあまり見られなくなった木製電柱も多く残っています。こうした工場のシステムや生活を支えた電柱が立っている風景も富岡製糸場の歴史的景観の一部なのです。

※2003（平成15）年国登録有形文化財（東京電力パワーグリッド（株）所有）

◆ 発行 ◆

富岡市世界遺産観光部 富岡製糸場総合研究センター

バックナンバー
はこちらから▼

